曇り、死神、伝説の脇役

ray

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
曇り、死神、伝説の脇役

【Ｎコード】
Ｎ８３０８Ｘ

【作者名】
ｒａｙ

【あらすじ】
バーン王国第二王子の告白

魔人に攻められ国を追われる王子。
逃走の最中、同盟国であるパンゼル王国の王女ダリアとの邂逅。
両国の誓約に縛られ、失踪中のバーン王国第一王子の帰りをあてどなく待ち続ける彼女。
叶うことのない、それでも、諦めきれない王女への想い。

彼の進む先には、果たして……。

告白（1）（前書き）

ネット上で見つけた、文字を入力するとランダムにお題を三つとジャンルを提示してくれるプログラムに「ｒａｙ」と入力して出てきたものを使って作った三題噺です。
文字数を考えずに作ると、三題噺というには幾分長くなってしまいました。ですので連載にしました。

ちなみに、ジャンルはキーワードにもある通り「邪道ファンタジー」です。
いかにしてファンタジーがヨコシマな道に逸れていくか、乞うご期待でお願いしますｍ（＿＿）ｍ

告白（1）

俺はバーン王国の王子だ。まぁ、厳密には第二王子なわけで、第一王子の兄が失踪中とはいえ将来王の位を継ぐなんて保証はどこにもなかったがな。

ひょっとするとそんなこと語る必要はないのかな。大事なのは俺に何があったかって事か。俺が何であったかってのも少しは大事だとは思うんだが。

思うんだが、まぁ……。

そんな肩書きどのみち関係のない話か。はは、世界が違えばこんな肩書き何にもならないよな。

実際、魔界からやって来た奴らにはどうにもならなかったからな。本当になすがまま、バーン王国が蹂躙の限りを尽くされるのを命からがらの逃走の中で見届けるだけだった。

あいつらは、普段は俺たちが魔界と呼んでいる別の世界に住んでいる。それで、決まって月のない曇りの日にやって来ては、バーンや周辺の国に攻撃を仕掛けてくるんだ。

奴ら、あぁ、俺たちの世界の人間は皆魔人て呼んでんだが、こいつらについては、初めての接触からそんなに日が経ってないってこともあって、曇りの日に灰色の雲の中からやってくるってことぐらいしかわかってない。

これまでは数えるほどでしかやってこなかったんだ。だから、いくらあいつらが個々の戦闘能力でバーン王国騎士団より多少優れていても何ともかなった。

毎回がこうだったから、俺たちの心のどこかに少しずつ、でも確実に油断が生まれ始めたんだろう。もしかするとそれすらも奴らの作戦なのかもしれない。とにかく今回の数は完全に予想外だった。

今回はいつもと違って数がけた違いだったよ。

大陸でも有数の力を持つといわれていた騎士団も数にはかなわず、城は破壊され町は火の海だ。そんな悲惨な状況でもあきらめずに戦う彼らを尻目に、俺は逃げるのにほとんど精一杯だった。

そして気が付いたら、俺はみんなとはぐれてたんだ。

必死で戦う彼らの事を思うと心苦しいが、その時既に「もうダメだな」っていう絶望感みたいなのが、自然と心の底から沸いてきてたんだよ。実際、同盟国の援軍が駆けつける前には結果は出てたよ。ほんの一時間足らずで一つの国が焼野原さ。

でも、不幸なのは俺たちだけじゃなかった。そいつらが襲ってきたのは知ってか知らずか、ちょうど同盟国であるパンゼル王国から王様と、王女ダリア様が挨拶に来てた日だったんだよ。

一人になった俺はみんなを探した。探しても探しても見つからなくて途方に暮れてたら、ダリア王女が遠くにいるのを見つけたよ。それで、名前を呼んで彼女の方まで駆けていったんだ。

彼女は俺に気付くと、それまでの不安そうな表情をほんの少し和らげたよ。たぶん、そう思う。

他には誰もいない。俺と彼女、二人きりだ。

ドレスはボロボロで、脱ぎ捨てたんだろうか、踵の高い靴ははいてなかったよ。それでも魔人に襲われたような形跡もなく彼女自身はほとんど無事だったみたいだ。

それが確認できたと思うと、惨状が収まったわけでもないのにそんなことも忘れて、ただただ安心したよ。

俺はバーン王国第二王子で、将来この国を治めることなんてきっとないだろう。だからといって、この国やこの国の民が嫌いになどなるはずがない。

むしろ、俺ははっきりとこの国を愛していると断言できる。

だからあいつら魔人は絶対に許せない。

それでも。それでも、だ……。

この時不覚にもバーンを襲った魔人に感謝しようとしてた自分がいたよ。

ああ、そうさ。俺は彼女に惚れてるんだよ。

彼女はバーン王国第一王子である兄貴との結婚が約束されてる。いつ戻ってくるか、いや、生死すらわかっていない兄貴とだ。いなくなってもう１０年以上になるんだぜ？

いっそ兄貴なんて放っておいて俺が彼女と結婚すれば、彼女が抱えてるあてもなく待つということの不安から救ってやれるんじゃないのか。

そんな偽善じみたことを本気で考えることすらあるんだ。

でも、今は偽善でも何でもいい、とにかく彼女を守りたい。そう思った。

告白（1）（後書き）

既に完成している作品ですが、読み返してみると直さねばならぬ箇所が散見されたので手直しをする必要がありそうです。

次回は明日中に上げられればいいなあと思います。

告白（2）

一瞬、このまま何もかも捨てて、二人でどこかの国で暮らすということも考えたんだ。でも、彼女の答えを受け入れる自信がなかった。それに、今は逃走中の身ではあるが、やっぱり祖国を捨て去ることなんてできない。できなかった。

それに魔人達がやってくるまでは、この大陸にあるバーンをはじめとする国家間は一触即発の緊張状態に陥っていたんだ。このどさくさに紛れて攻め入ってくる国がないなんて誰が信用する？

やはり、何もかも捨ててという選択肢は俺には選べなかった。

今の状況では、パンゼルを目指すのが最善じゃないかって。もしかしたら親父やお袋たちとも会えるかもしれない。

魔人に襲われる危険はないだろうが、歩いてパンゼルまで行くには結構な距離があった。急ぎこそしたものの、休憩をはさんだりして、決して焦るようなことはしなかったよ。

その休憩も含めた道中の話なんて別に聞きたくないだろう？　惚気話なんて形で脱線するのって、ひょっとすると考えられるうちで最もヒドい時間の浪費かも知れないな。

もっとも、俺もあまり話したくないんだ。この二人だけの秘密は天国まで持っていくよ。

いや、地獄かな？　ひょっとするともっと違う所に行くことになるのかな？

まぁどこに行くかなんてそんなこと、そう遠くない将来わかることか。

まぁいいや。それで、どこまで話したっけ？

……あぁ、そうだ。

それで、思いのほか時間はかかっちまったが、これといったトラブルもなく何とか彼女の国の近くまでたどり着くことができたよ。

もうすぐで彼女の国まで着く。そう思うと無事ここまでこれてよかったってのよりも、二人だけの時間ももうすぐ終わるのかって、ずっと考えてるんだ。

だから、聞いちまったんだ。受け入れる覚悟なんて、できてなかったのに。

「王女様、私と結婚していただけませんか？」

本当に唐突に、口から漏れ出るようにそんな事言ってたよ。

だからってこんなこと言っておいて、今更ナシなんて言えるようなもんじゃないだろ？　言い終わった瞬間に心の中で頭を抱えたよ。

両手も頭も心の外にあるのにどうやって心の中で頭を抱えるんだろうな。

それぐらい意味が分からなかった。自然と言葉が出てきたんだ。

表面はあくまで平静を装っていたつもりだけど、彼女の目にもそう映ったかどうか、自信なんて全くない。だから彼女の表情はうかがい知ることができなかった。下を向いて、ずっと見ないようにしてたんだ。

長かったよ、彼女の答えを聞くまでの時間は。

どれだけの時間が過ぎたかなんてわからない。でも、情けないことにこの膠着状態に負けて顔を上げた。すると、彼女と目があった。

微笑んでいたように思う。

まるで俺が顔を上げるまで待っていかのようなタイミングで、彼女が口を開いた。何かを言おうとした。

……その時だったよ。

一言目を言うか言わないかの所で彼女の動きが止まった。そして、突然不気味な黒い人影が彼女の体から滲み出てきたんだ。

その瞬間から、今の今までは嫌という程も感じられた彼女の意識がどこかにいってしまったかのように急激に失われた。

俺には分かったよ、彼女には全く意識がなかった。

まるで地に足がついたまま糸で釣られている人形のように、ぐったりとしていた。

まずいなんてもんじゃない。俺が彼女を押し倒さんと跳んだのは黒い影が完全に遊離しきるほんの少し前だ。

彼女を抱いたまま地面に倒れる瞬間、そいつが両手で持ってた大きな鎌が風を切る音をすぐ耳元で聞いたよ。

死神が襲ってきたんだ。よりにもよってこんなタイミングで……。

告白（3）

死神ってのは、どんな人間にでも一人に一体だけ潜んでいると言われてる。見た目については今更説明する必要もないだろう？

普段は一切それを認識することはないんだが、何かのきっかけで突然現れて、今みたいなやり方で魂を奪っていくんだ。

魂を奪われた人間は、それまでどんなに健康でも、体に一切の損傷がなくても死んだのと全く同じ状態になるんだ。

また、ある人から出た死神が別の人を襲うことはない。

我を取り戻した彼女は俺の腕の中だ。唐突に告白された次の瞬間これだ。本当に最高の気分、最悪のタイミングだよ。

でも、そんなこと悠長に言っていられる余裕などない。

彼女を急いで起き上がらせた俺は、、死神と距離を取って対峙した。彼女は俺の後ろにいる。

「王女様、お怪我はありませんか？」

俺は彼女に背を向けたまま確認した。

「ええ……。何とか」

とりあえずは一安心だ。本当ならすぐにでもちゃんと無事を確認したかったけど、奴から目を離すわけにもいかない。

俺は腰に下げた鞘から護身用の短剣を取り出し片手で構え、奴を睨めつけた。

死神は何やら様子をうかがっているようで、じっと俺たちの方を見たまま何もしようとしてこない。それがかえって一層不気味なものに映ったよ。

だからってこいつから逃げることはできない。魔人と違って、こいつはやり過ごせる相手じゃない。排除するまではいつまでも獲物にまとわりついて、その隙を今か今かと狙ってるんだ。そもそも排除自体できるかどうかもよくわからないんだ。

でも何もやらなきゃ確実に彼女の魂はあいつに連れて行かれる。だったら戦うしかないだろう？

実際何度か死神に襲われてる人を見たことがあったのだが、彼らは決まって、無抵抗のままに魂を奪われていくんだ。周りの人間も別段何をするでもなく彼らの最期を看取るんだ。

でもそれは決して薄情だとかそういうものじゃない。

俺たちの国で生まれて生活してれば「影が遊離したら最期、死は不可避」っていう、諦めにも似たような覚悟は自然と培われていくんだ。

だけど、今の自分にはそういう風に振る舞うことがどうしてもで

きなかった。

彼女はまだまだ若い。決して人並ではないが幸せな家庭、両国の繁栄、魔人討伐、残されていることはまだまだたくさんある。

もちろんそれも大事だが……。

まだ返事が聞けていない。

そう思った途端、今更ながらそれを聞く覚悟ができた。

なんというか、色々なことが起こりすぎて、ほんの少しだけ頭が変になってたんだろう。

「ハハハ、なんて野暮な死神だ。王女様。先ほどの返事は邪魔者がいなくなった後にもう一度お聞かせください。ですから……。」

きっと、だからなのだろう。

「俺のそばから離れるな」

そんな恥ずかしいことをさらっと言ってしまったのは。

こちらも感情のままに言ってしまったことだが、先ほどの告白と違って後悔なんてものは微塵も感じちゃいない。

彼女が「はい」って言ったのが聞こえたよ。背を向けたままだったから表情まではわからなかったがな。

しばらく膠着状態が続いたが、死神の方から動き出した。

告白（4）

話を続けよう。

さっき「ある人から出た死神が別の人を襲うことはない」って言ったが、それには例外があるみたいだ。どうやら自分の仕事を邪魔する奴には容赦はないみたいだな。まあ、当然と言えば当然か。

はじめは、器用なことに俺を攻撃しないように気を遣いながら王女様ばかり狙っていたんだ。それを俺が邪魔するというのが幾らか続いた。

すると、どうやらターゲットを俺に変更したみたいだ。俺の魂を奪った後ゆっくりと、っていう算段なんだろう。

ついつい心の中で「よし」って思っちまったよ。こうなったら多分、俺が死ぬまで奴が彼女を襲うことはないだろうからな。

第二だとはいえ、俺だって一国の王子だ。それなりに戦い方なんてものを教え込まれたものだ。この時だって武器になるようなものなんて護身用の短剣しかなかったけど、この程度の相手なら攻撃をかわしながら彼女を守るというのも問題なかった。

だから、ここからが本番だ。

「王女様、奴の様子が変わったみたいです。ほんの少しばかり、私から離れられた方がよろしいかと」

先ほど離れるなと言ったばかりなのになんて考えもしたが、標的

が俺に変わったんだからいくらか距離をとった方が彼女にとっては安全だろう。

彼女は「わかりました」とって一言、離れ際に「絶対に勝ってくださいね」ってもう一言。

彼女のこの言葉を聞くだけで、「問題ない」が「負ける気がしない」に昇華しちまったね。

背中を向けててよかったよ。一瞬だけ現状を忘れて顔がゆるんだのをはっきりと自覚したよ。

すぐに気を引き締めて、

「お任せください」

とだけ、答えた。

そうは言ったものの……。奴の鎌にはちゃんと触れられるみたいなんだが、死神を切ることなんてできるんだろうか。

そんなことを考えてる間も攻撃は続いている。

奴の獲物はその特性上攻撃のパターンが限られてくる。それに鎌をふるう速度も大したこともなく、はっきり言ってこの程度なら単発で攻撃を食らうことはないと判断したよ。まぁ、だからと言って決して油断はできない。不意に本気の速度で切りかかられるなんて

こともないわけじゃない。

これもその特性なのだが、奴の獲物はとてもリーチが長い。だから、俺は俺でなかなか距離がつめられないんだ。短剣じゃ相手の懐まで潜り込めなきゃ当てられない。だからってこのまま一方的に打たれ続けるんじゃジリ貧だ。あいつが体力を消耗しているなんてどうしても考えられなかった。

鎌を振る速度は大したことないって言っても、自重に獲物の長さによる遠心力が加わると、短剣で捌くには少々荷が重い。なるべく躱すようにしたんだが、どうしても短剣で防がなきゃならない場合もある。

この短剣はかなり頑丈な方なんだが、あんな重い攻撃何回も受けてたらさすがに持たない。

奴の攻撃を捌きながらしばらくそんなこと考えてたが、やっと”決めた”決意ができたよ。遅いぐらいだったのかもな。

振り下ろしてきた鎌を、渾身の力で大きくはじく。そうしてできた僅かな隙を使って一旦大きく後退して可能な限り距離を取った。そのまま懐に攻めてたらまず間違いなくやられてた。

一呼吸置いて気を落ち着かせてから、相手との間合いを測る。

そして、先程稼いだ距離を駆け足で詰めた。

奴がその場で鎌を振り上げた。懐に飛び込む前に振り降ろすつもりだろうが、構わず距離を詰める。

鎌が振り下ろされた。このままいけば確実に攻撃を食らうことになる。

それでも、距離を詰めた。

禍々しく輝く刃が、迫ってきた。

避けるな。そう自分に言い聞かせた。

まだだ、と。

歩調を気にしながら、更に距離を詰める。

もう少し、あと少し、だ。

今しか、ない。

死神の鎌が俺の脳天を捉える寸前、踏み込んだ足で強かに地面を蹴る。その反動と膝のばねを連動させ、さっきよりも数段上の速度で残りの距離を詰め、死神に肉薄した。

踏み込みが後ワンテンポでも遅れていれば、奴の狙い通り自分は魂を奪われていただろう。

死神とて油断していたわけだはないだろうが、咄嗟のことに反応

がほんの少しだけ遅れた。

その隙をついて、踏み込みの勢いを短剣に乗せて奴の胸元を切りつけた。

致命傷と言うのか何と言うのかはわからないが、とにかく効果はあったみたいだ。あの死神はその後、靄みたいになったまま王女様の体の中に帰って行ったよ。

出てきた時みたいに無意識になるんじゃないかと一瞬不安になったけど、特に何か変わったことが起こった様子もなかった。

今後どうなるか全くわからないが、少なくとも今この時点で再び彼女が襲われるということはないんじゃないだろうか。

正直言ってこうも事がうまく運ぶなんて思ってなかった。だから死神が体に戻ってきて、うろたえながらも元気そうな彼女を見て本当にホッとしたよ。よほどのことがない限り、誰かの死神とはもう二度と戦いたいとは思わないね。

とにかく、この戦いは終わったんだ。

短剣を鞘に納めようとする前に彼女と目があったよ。

笑顔だった。

俺も笑顔を返したよ。告白の返事も気にはなったが、今は彼女を守り切ったって達成感やそのご褒美とばかりの彼女の笑顔をもっと味わってたかった。

……しばらくもしないうちに彼女が走ってこっちにやって来ていたんだ……。

どさくさまぎれってのはちょっと不本意だが、走ってくる彼女をそのまま抱きしめたいと思ったよ。
だから、まずは短剣をどうにかしようと思ったんだ。

でも、どっちの手にも短剣は握ってなかった。

短剣は既に、鞘に納められていたんだ。

訳が分からずにいるうちにも彼女が急いで俺の方にやってくる。

笑顔じゃ、なかった。

告白（4）（後書き）

告白編はここまでですが、話自体はまだ幾らか続きます。
しかしながら笑顔でないというのならば、一体何だと言うのでしょうか。
乞うご期待でお願いしますm（＿＿）m

しかしながら終わり方がワンパ気味だなぁ……（＿＿；）

審判（1）（前書き）

都合上、いつもよりほんの少し短めになっています。

審判（1）

「……で、気が付いたらあんたらの前で、言われた通りに『この日そなたに起きたことを説明せよ』なんていう問いに今し方答え終わったところだ。彼女の答えを聞くまでの時間は長いなんてもんじゃねぇ。聞けず終いさ」

自身の最期の日に起こった出来事を告白し終えたところで、しばしの沈黙が生まれた。この期に彼は、ここが一体どこであるのかについてを考える。

この空間は見渡す限り真っ白で、何もない。床と壁の区別もつかないほどに真っ白である。
ここがどういう所かというのは漠然とながらに理解できたし、何より、これ以上理解する必要もないという結論に至った。

「テメェの話の方が長ぇっての。誰が好きだの、死神をどうやって倒したなんて聞いちゃいねえよ。人が黙ってきいてりゃいい気になって馬鹿みたいな説明口調になりやがって鬱陶しい」

彼の話を聞いていた三人の男のうち最初に沈黙を破ったのは、王子が話している間始終仏頂面を顔面に貼り付けていた男だ。

背は王子よりも低い。曲がった腰がそれをいっそう強調する。なぜか両手には鉤爪を装着している。口調その他諸々から判断するに、頭のよさそうな雰囲気はあまりない。口汚い言葉を並べて王子を罵倒する。

「まぁ落ち着け。幸せのうちに魂を取られたのだ。いくら話が冗長

だからとてそう言った事情も汲んでやれ」

そういって仏頂面を冷静にたしなめる男。彼は、小柄鉤爪男との対比効果もあって縦に長く見える。各部位が全て大なり小なりの直方体でできているかのように異常に均整の取れすぎた身体付きをしていて、どこか神経質そうな印象を受ける。

直方体の男が何の気もなく『魂を取られた』と言っていたが、王子自身きっとそうだろうと思ってはいたようだ。

「まさか他人の死神追っ払ったすぐ後に自分の死神に魂持って行かれるなんてな。そりゃ災難だったな、単にテメェがマヌケだったと言うべきかァ？　キャキャキャ！」

全く事情を汲まない鉤爪。その人を馬鹿にしたような口調よりも、主にその内容に関して王子は平静を保てない。

危険を承知で王女様の死神を退治したのに、最悪とも呼べるタイミングで魂を奪われてしまったのだ。
こんなことがあるというのかという驚きの顔を浮かべる。
今、こういった場所にいることを考えると何らおかしなことではないのだが、直感的にはどうも受け入れられない。

しかし、同時に最期に王女が焦ったように駆け寄ってきた理由に合点が付いた。

――とんでもない勘違いをしたまま死んじまったんだな、俺。

あまりの恥ずかしさに王子は、人目もはばからず地べたにうずくまりたくなった。

審判（1）（後書き）

さて、ここに来てのこの展開、いかがだったでしょうか？
告白の中で告白するというややこしい話ですね（＾д＾；）

話自体はここで完結でもいいように思えますが、いかんせん最後のワードが……しかも伝説の脇役て（・∀・；）
三題噺処女作にして早々にその縛りの洗礼を受けることと相成りました（＾д＾；）

ストーリーもさることながら、果たしていかにして最後のワードは回収されるでしょうか。もう少し乞うご期待でお願いしますm（＿＿）m

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8308x/

曇り、死神、伝説の脇役

2011年10月26日11時08分発行